

## 札幌文化芸術未来会議を振り返って

### ・札幌文化芸術未来会議とは

文化芸術関係者が新型コロナウイルス感染症の影響を受けていることも踏まえ、市の文化芸術に関する短期的及び中長期的な施策の推進に関して意見交換を行うため、新たに「札幌文化芸術未来会議」を設置しました。

・期間: 令和2年11月～令和4年3月

・委員(五十音順):

伊藤千織／伊藤千織デザイン事務所 代表  
漆崇博／一般社団法人AISプランニング 代表理事  
大友恵理／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員  
尾崎要／アクトコール株式会社 代表取締役  
カジタシノブ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター  
木野哲也／ウタウカンパニー株式会社 代表  
古家昌伸／元北海道新聞記者  
小島達子／株式会社 tatt 代表取締役  
酒井秀治／株式会社 SS 計画 代表取締役  
佐久間泉真／市民委員  
八條美奈子／札幌フルーツ協会 副会長  
関鎮京／北海道教育大学岩見沢校 准教授  
森嶋拓／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長  
山本雄基／画家

札幌文化芸術未来会議(以下、未来会議という)にご参加いただいた委員の皆さまから、この会議を振り返ってのご意見・ご感想をいただきました。

### 【未来会議を振り返って】

1. 未来会議に参加して良かった点
2. 未来会議に参加して貴方の文化芸術活動に役にたった点
3. 未来会議の課題や改善点、今後の札幌文化芸術未来会議のあり方等
4. 札幌市の文化政策に期待すること、文化政策のあり方等、今後の「札幌市の文化政策」
5. 札幌市文化部に一言

## 1. 未来会議に参加して良かった点

▶ジャンルや考え方の異なる、しかし札幌の文化芸術の未来に対し共通の熱い思いを持っている方々と意見交流できたことは、自分の文化芸術活動の範疇では得られない経験となりました。勉強不足・経験不足で意見ができなかったり、実感を持って他の方の意見に賛同することはできなかったことも多々ございましたが、成長させていただきました。

▶制度設計、ルールメイキングのプロセスに関わられた経験・全てではないですが各分野の声・考えが聞けた点。

札幌市や文化部の思考・指向を知れたこと。

新しい課題や疑問を感じられたこと・その他、いろいろ考えさせられたこと。

▶日常的に文化芸術に関わる人間として、ながく疑問に思っていたことや、こうあればよいな、と思ったことを委員だけでなく、文化部の方々とも共有できたこと。自分とは違った視点での意見にふれられたこと。札幌市の文化行政の大きな流れを知れたこと。行政と民間が共同して、新たな公共を担っていく第一歩が踏み出せるかもしれない、という可能性を感じられたこと。

▶まず、これまで、このような会議のようなものに参加したことがありませんでしたので、自分の役割がどういったものなのかを理解するまでに時間がかかりました。札幌を拠点に活動する様々なジャンルのアーティストの方たちと交わることもなければ、文化部の方々と意見を交わすというのも初めてで、とにかく勉強になりましたし、自分の見てきた世界が如何に狭かったかも知ることができて、今後の自分の活動のためにも非常に有難い機会を頂いたと思っております。ただ、最後まで様子見をしてしまったと言いますか、他の委員の皆さんのご意見を聞いて自分の考えをまとめるといった形になってしまい、積極的な発言ができなかったのが反省でした。

▶さまざまなジャンルの方がいたため議論の中で出てくる事例等、本当に多岐に渡るお話が聞けました。

▶札幌の芸術文化において、札幌市と民間団体の間にはまだまだ齟齬や誤解が多いと感じる。信頼関係が十分に構築されていないこともあり、民間団体は行政に対して批判がちや不信がちになるし、一方の行政は札幌市の芸術文化事情への理解度が深まりにくい環境だったかと思う。 これまでも円卓会議などは行われていたが、今回のように札幌市文化部和民間団体やアーティストが協働して、実際の提言にまで繋げることができたのは非常に有意義なことだったと思う。

▶様々な分野で活躍する方と知り合い、考え方を学ぶことができました。専門に関することでぎゅっと狭めて集中するのは得意でも、アンテナを広げて色んな考え方を取り入れることが少なかったので、視野が広がったというか、これから広げなければならないと思いました。

▶参加者それぞれの立場から、特に実務的な役割を担う、活動現場の最前線に立つ方々からの意見は大変刺激的でした。そして文化行政を担う方々に、枠組みやシステムの話だけではない生の意見を届けられたことが、新たな支援制度の設計につながった成果は大きいと感じています。

▶自分が関わる美術だけではない他ジャンルの表現の現場の実態を知る機会になったこと。・文化部と直接向き合って議論することができたこと。

自分も「表現者かつ市民」という自覚を持って、今必要な文化支援について考えたり伝える機会になったこと。

自分だけでなく周りの作家仲間からも普段なかなか話さないような実態を聞く機会になったこと。

▶各分野の表現の第一線にあり、かつ表現活動の背景や環境を複合的な視点で見ることができ(そしてやたらと口数の多い)人たちと交わることができて、たいへん刺激になりました。前例のない政策を立案する際の、市役所の方々から見た舞台裏も、かつて取材する側ではいろいろ接しましたが、また別の立ち位置で接すると新鮮でした。

▶札幌の芸術文化を担うみなさんと出会えたこと、考えを聞いたこと。

▶文化芸術関係の業種に関わっていながら、恥ずかしながら今まで札幌市の文化行政というものに全く無知であったことに気づいた点。その上で、私たち市民が無自覚に享受している様々な文化的なインフラや活動というものも、行政に関わる皆様方が熟考され計画された政策のなかで成り立っているということを知る機会になりました。・日頃横のつながりのない、文化芸術関係の異業種の方々と忌憚ない意見交換や交流ができたこと。それぞれの業界の抱える課題などを知ることができ、自分の分野にフィードバックして考えるようになりました。人の繋がりが広がったことは貴重でした。

▶単に対役所的に意見を言いつけずではなく、市の文化施策の体系や事業構築のプロセスを理解しながら、新たな文化施策・事業の立ち上げ・デザインにつなげられたこと。

▶新型コロナウイルス感染の拡大が出現した当初から文化芸術の基盤が大きく揺らぎ、諸活動が激減する等、危機的状況に直面しました。しかし、行政と民間の現場が意見交換や情報共有

するネットワークがなく、文化芸術関係者同士でもこの問題について考え、議論する場もありませんでした。このような状況の中で、札幌の文化芸術の影響や被害の実態を明らかにするために広くアンケート調査を実施し、その結果に基づいて5項目の政策提言を札幌市に提出しました。その一つが「ネットワークの発足」でした。それを札幌市が受け止めて、札幌市文化芸術基本条例<第10条>「文化芸術の意見交換の仕組み」に基づき、新たにこの「札幌文化芸術未来会議」が設置されることになりました。この会議は単に意見交換に留まらず、政策形成のための材料を提供する役割にまで広がったのが大きな進歩だと考えています。その理由は、それまでは行政主導の政策形成によって現場の声が反映されにくい問題を抱えていたのですが、民間や芸術関係者がその政策過程に入ることができ、徐々に現場に寄り添った政策が作られる基盤ができたからです。未来会議の各委員も実際に政策につながることを意識し、短期的・長期的な支援策について真剣に議論しましたので、議事録の形としても、また政策研究材料としても価値の高い活動内容だと思います。さらにその内容がアーカイブにされるので、次世代の人たちが同じような危機的パンデミックの時に、先人たちが文化芸術活動を中断させないためにどのような議論を交わしたのかを知ることができることも重要な価値を持ちます。

## 2. 未来会議に参加して貴方の文化芸術活動に役にたった点

- ▶文化芸術活動と行政の距離感、在り方について考え直すことができました。文化芸術活動を単なる私的なものとしてだけでなく、公共的な視点・性格を持って活動に取り組むことができるようになりました。
- ▶活動そのものへ直接的に役に立った事実は感じておりませんが、定性的な意味合いで、この参加経験が活動する自分やチームのプラスとして今後活かされるものでありたい。
- ▶多様な意見に触れ、より幅広い視点から物事にあたっていく必要性があると感じられたこと。
- ▶アンケートの結果や、議論の中での他ジャンルの皆さんの思いなどを伺って、自分の活動ジャンルは閉ざされているのではいかとつくづく感じました。これからの札幌の芸術文化を担う次世代のために何ができるかを考える良いきっかけになったと思っています。
- ▶役に立ったかという視点では、特に思い当たらない。これまで考えていたことを伝えることができたので、その点は良かった。
- ▶少しは自分のやっていることの社会的意義を考えた上で、次の活動目標を立てようと思いました。若い頃は自分のことで精一杯というのもあってがむしゃらに走っていましたが、ある

程度経験年数も経って、このような会議にも加えていただき、札幌の次の未来を考えることの重要性を再認識しました。

▶札幌市における行政の制度設計に関する大まかなタイムスパンや、その考え方、行政職員の方々のご苦勞を改めて知る機会となり、自分たちの活動を公の機関と協働する際の参考になりました。

▶僕自身は現状どちらかと言えば文化行政の助成金をあまり頼らないタイプの作家で、直接的に役に立ったことはあまりないかもしれません。そういうつもりで参加したわけでもなく、周りの作家の希望や不満などを集めてまとめて、伝える役割を背負うつもりでした。なので負担の方が大きかったかもしれませんが、コロナ禍で美術の世界でも今までにない自分たちの権利を訴えるような運動が多発的に起こり、そういう動きを自分でも体感してみたい、具体的に知りたいという欲望もあったので、その点で今まで触れてこなかった美術と行政の関係性の知識を得ることができたことはとても良かったです。

▶委員のみなさんの考えの違いや共通認識を知ることができた。自分の仕事を考える上でも刺激を受けました。

▶自分の関わっている分野の社会的・文化的・職能的な立ち位置について改めて客観的に見直すことができたことは、業界全体の未来を考える上でも役に立つと思いました。

個人的には、今まで関心が薄かったジャンル(演劇やダンスなど)にも興味が湧き、視野が広がりました。今後、他分野とのコラボレーションや横断的な協働・活動などの可能性も感じます。とにかく他の委員の皆さんの考え方や知識に圧倒されっぱなしでしたが、思考の訓練にもなりました。

▶「プランナー」と「プレイヤー」の立場を行き来しながら、体系的に大きく構想すること、現場のものに触れる感覚からプロジェクトを具体的にデザインすること、両側面を持つことが大切だと考えています。未来会議では、様々なジャンルや生業の方の意見・パフォーマンスから幅広い視点を得られて良かったです。また、昨今、まちづくり側の人間が社会にアートを生かすということがよく見られますが、根幹にあるアートの純粋な創造・表現活動として価値について、実際のアーティストの方々の話から改めて感じることができました。

▶各委員は「札幌の文化政策を変えたい」という確固たる意志や強い情熱が共通していたのが主たる所感です。それは日ごろ活動する中で、政策の問題点に常に悩まされながら改善策を模索してきているからだと思います。特に委員の発言から文化芸術活動を取り巻く問題の根底には複雑でリアルな諸要因があることの確認や探求ができ、研究者として現場を知ることは

もちろん、物事を立体的に俯瞰する必要性を改めて学びました。

### 3. 未来会議の課題や改善点、今後の札幌文化芸術未来会議のあり方等

▶ご時世柄やむを得ないのですが、オンライン開催だとなかなかコミュニケーションを取ることが難しいことがありました。

▶「市職員がグループディスカッションや意見交換へ参加することは出来ないのか?」「SIAF関係職員、芸術文化財団職員などの会議への参加、意見交換、ヒアリング」「市議会議員の参加、意見交換、ヒアリング」などについて、未来会議で自分は何度か提案・提言・質問を含めて発言してきました。「制度をつくる」というシンプルな議題に対して私たち委員は、その答えを導く「だけ」の役割だったのかもしれませんが、結果的に市もそれ以上は求めていなかったのかもしれませんが、多様性に富む文化芸術のこと、この先の未来のことを会議するととても想像&創造的な場でありながら、今現在、市の文化芸術の現場で直接関わっている委員以外の「多様な声・価値観・現状」を場に持込むことができなかつた。なぜ叶わなかつたのか。それを望まなかつたのか。必要無いと判断したのか。結局分かりませんでした。その点においては未来と謳いつつも視野の狭さ、クローズ感のある会議であつたと感じています。何だかもったいない。。。市の芸術文化基盤の底上げを計ったり、アーティスト支援だったり、地域社会の様々な現状課題への解決の糸口を創出する制度をつくるとしたら、やはりそれに上述の人に限らず現場に関わる多様な声から「知る・共感する」プロセスは外せないだろうと思います(アンケートとは別軸で)。今回の委員の誰しもがマルチな能力に長けている訳ではありませんし、外部の著名な専門家集団に制度設計を一任する訳ではないのしょうから、この過程・Work in Progress な会議(進行)こそ、クリエイティブであつて欲しい。そんな会議の姿勢や空気があると、強度の高い、継承すべきレガシーやプライドが1つ生まれていくんだと感じます。流行り言葉をあえて使いますが、多様性や共生の観点からも、せめて上述の方々には参加いただける場づくりが欲しがつたです。

▶委員の意見を元に会議が進められましたが、もっと行政としての縛りなど、文化部さんからも制約を聞いたうえで、それらを乗り越えていける議論をしたがつたと思います。 はじめて設置された会議体ですが、今後も是非、継続していつていただきたいと思います。

▶議論を繰り返して、さあまとめようといった際に文化部から提示されたまとめ内容が、まったく予測されていない方向に転換していたり、話題に出てきていないワードが出てきてそれでまとめられようとしたことが数回ありましたが、そこはただただ残念でした。ただ、そんな中でも内容の濃い議論が度々行われて、有意義な時間ではあつたと思います。他の委員の方々

の頑張りにはとにかく感服致しました。

現状では行政側は質問に答えるという立ち位置での参加はあったが、議論の中に行政側も同じ土俵で参加した方が良い。図式的には委託先と受託者のような図式になってしまい、思考と反映が分離しているように感じる。「思考」し「反映」するということをセットで行う癖を双方つけていくことが重要かと思う。

➤委員同士で話し合うことがほとんどであったが、文化部の皆さんとも議論を交わすことができればもっと良かったと思う。民間団体はアートへの知見が優れているが、行政の職員は制度づくりや予算管理に優れている。両者の知見を組み合わせることができれば、よりよい制度が作れるのではないだろうか。民間団体と行政の関係性を継続する為にも今後もこの会議が継続して実施されることを願う。あとは、人数がやや多いのでは？と最初は感じたがグループワークを取り入れたことが良かったと思う。個人的にはもう少し突っ込んだ政策の話をしたかった側面もあるが政策や助成にそれほど詳しくない方もいて、それはそれで重要な意見が多いただけたので結果的に人数や人選のバランスが良かったのかな、と思った。詳しい人ばかりだともう少し偏った会議になったかもしれない。

➤なかなか都合が合わず、半分くらいしか参加できませんでした。会議日程調整がギリギリすぎると思います。それと、調整の結果、参加人数が多い日程に決定されるのですが、あまり出席できていない人にスケジュールを合わせる回があってもよかったように思います。今後もぜひ未来会議は継続して行ってほしいですが、色んな職場や立場にいる人が気兼ねなく参加できる会議であって欲しいです。

➤定例的な会議への参加以外の場面で、意見やアイデアを求められ、打ち合わせが必要となることが多く、任意でありながらそこに主体的に参加していなければ情報が追いつかないことがあったように感じています。未来会議の目的が、単に行政が民間から意見を拾う場でなく、民間と共同で新たな政策提言、制度設計に関与する場になることは素晴らしいことですが、それにしては委員の負担が大きいと感じる部分がありました。今後は、委員の負担を減らすということではなく、未来会議の意義を高めるために、時間、労力、アイデアを提供する側への配慮が必要なのではないかと考えます。

➤もう少し一番の当事者である表現者の人数割合が多くても良いのではとは思いました。多すぎるとそれはそれで話がめっちゃくちゃになりそうなので諸刃の剣ですが。美術領域の表現者が自分1人だったのは責任も重めでちょっと心細さもありました。全ジャンルをまとめて一つの会議で扱うことには良し悪しあるかなと思いました。それぞれの悩みを俯瞰で共有できるのは勉強になった反面、ジャンル毎に必要なとしている支援はかなり違うと思いますので、そこをいくつもの中間支援組織でカバー可能だという仮説の展開でフォローした気になってしまっ

たのはやや急ぎ気味で追いつけないケースもあったのかも？とも思っています。 今後も、このような文化芸術の当事者、専門家が、文化部と直接対話ができる仕組みは継続して欲しいと思います。その際、今回の未来会議の根本理念のような、現場の状況を具体的に把握して、何が求められているのかを認識するような空気感と、「表現者＝市民」であり、表現者としても生きやすい社会を作るという意識も継続して欲しいと思います。

➤こんなに口うるさいメンバーを十数人も集めた猛獣つかい(それは座長のことであります)のようなことを、よくやりましたね、という印象です。平均3時間の議論を毎月続けるというのは、メンバーも事務局も並大抵の労力ではありません。ただ、いつも飲み会のことばかり言っておりますが、未来会議の本会議のような公開の場では市役所の方たちの本音を聞くのは難しく、2、3ヶ月に一度ぐらいは事務局を交えて、朝まで討論をしたかったですね。それによって議論のストライクゾーンも見えてきて、ギリギリの変化球もうまく決まるようになったかもしれません。

➤コミュニケーションを大事にすること。行政の仕事だからと無意識に陥らず、会議で集約した認識を尊重して進めることでしょうか。

➤こんなに自由に遠慮なく時には厳しく、リアルな意見の飛び交う市の会議は初めてでした。行政の会議にまみ見られる予定調和的とか建前論ではない、議論としては非常に濃い内容だったと思います。それぞれの委員が当初から沢山の意見やアイデアを持ち寄りましたが、一方それらが政策や予算組みに集約されていく中で、本質的な部分が薄くなっていったり現実的な落とし所にいきなりまとまっていたり、と正直拍子抜けする場面も散見されました。(意見がバラバラかつ膨大すぎるので止むを得ないと思いますが)委員のクリエイター的思考と、行政的な話法や表現への変換、の間にもう少し繋がり報告なりがあるといいのかもしれませんが。せっかくここまで関った創造活動支援事業ですので、成果を見守れる または 事業の評価をラップアップする機会が今後あると嬉しいです。

人数はフルで揃うと多いかも。もう少し丁寧に意見を聞いてみたい委員の方もいました。(ほぼ参加できない委員の方がいらしたのも残念でした。)

➤未来会議は、円卓会議から一歩進めて、市民との「協働」による文化施策づくりへのチャレンジでした。しかし、まだ行政の枠組みへの「参加」の域を超えていないと思います。どうすれば行政と市民・民間がフラットに意見を交わし合えるか、市民側が責任を持って文化施策やプロジェクトづくりに主体的に関わることができるか、1年半の取り組みを生かして長く続けるための仕組みについて考えていく必要があると思います。

➤本会議は毎回 3 時間にわたって開かれ、さらにグループワークがある場合は少人数で絶え



ず議論をしなければならないため、委員には多大なる負担がかかっていました。一方で行政は会議の準備のために、毎月 2 回ほど、委員長・副委員長と 2-3 時間にわたって反省会を含めた事前打ち合わせを行い、会議で出た議論の内容を深めていました。このように双方の真摯な努力があったからこそ、前例のない活発な議論が繰り広げられる会議が開催されていたと思います。本会議はコロナ禍において持続可能な文化芸術活動の基盤を構築するために発足したのです。今後はどのような具体的な政策課題に基づいて次のステップの未来会議を進めるのか、またはこうした会議自体が継続されるのか等、まだ提示されていません。会議を振り返ってみると行政や委員の本気度が試される場だったに違いありません。この精神を大切にしながら今後は、①文化芸術の実態について安心して話せる場 ②行政と委員が対等な立場で喧々諤々の議論を戦わす場 ③文化政策の新しい潮流を作り出す場になることを期待します。

#### 4. 札幌市の文化政策に期待すること、文化政策のあり方等、今後の「札幌市の文化政策」

▶ 未来会議委員や札幌市文化部だけでなく、多くの文化芸術活動者、特に文化政策への関心が薄い文化芸術活動者にも札幌市の文化政策にかかわってもらえるような仕組みがあると良いと思います。誰もが自分を当事者として考えられるようになれば、より活発な議論が進んでいくと思います。

▶ 定量・定性的にも、文化・社会的効果的にも、アーティスト支援や自立、経済効果、シティプロモーション、観光経済、雇用創出などなど、多くの観点があるでしょうが、「市の文化政策」によって叶えたい具体的な現象とはどんなものでしょうか。またはどう在りたいか？など、ひとりひとり言葉を聞いてみたいです。その言葉たちが(明瞭でカッコイイフレーズじゃなくても)、市民との共感を強くするでしょうし、クリエイター達からの支持と信頼を得るのだと思います。例えば、こんな質問。。。クリエイティブシティとは何か？何がどれくらいクリエイティブなのか？楽しくてワクワクに溢れた街の姿とは何なのか？次世代が次々と世界に飛び出していく街の素地とは何か？創造&発展がますます期待されつづける街とは何か？高齢者や障がい者が活躍し笑顔になれる地域の姿はどうやって生まれていくのか？世界中から注目されるには先進性だけが大事なのか？(無限にあります。。。)市の政策である以上、このような疑問や答えの模索を、職員や理事者ひとりひとりが抱いていくことが「文化政策」の出発点になっていくんだとも感じます。この「共感」を強いメッセージで発信しつづけること。共感の強度をより強くするために、ネットワーク構築と信頼関係を獲得すること。そのために予算を使い、多様な議論の場、挑戦的かつ具体的な実践を続けること、後押しすること、それを更に発信し続けること。トライ&「エラー」を糧にすること。

▶ 札幌の文化芸術を担っているアーティストの、創造活動に対するサポートが厚くなっていっ

てほしいと願ってます。

➤今後も民間の声を取り入れた開かれた行政のあり方を期待します。こちらが何をどうやってもどうせ無駄な努力だと思われてしまっははおしまいだと思います。これまで話してきた中間支援組織に関しては必ず実現してほしいですし、それが素晴らしいものになることを願います。ただ、結局のところ未来会議の中でも中間支援組織の形について、一貫したイメージはできていないのだろうと感じました。そこは時間がもっと欲しく、どこまででも話したかったところですね。

➤やらなければいけないこと以外をいかに考え実施していけるか。やらなければいけないこと、どこかでやったこと、自分達がやってきたことを踏襲、というやり方はローカライズもできなければ時代の流れ・要求に対応できない。声の大きいところばかりを見るのではなく、実態を見るために町へ出て見る、話を聞くも重要ではないだろうか。

➤50年後、100年後の未来を考えた時に、世界はどうなっているか想像もつかない。農業のロボット化(=無人化)、地球環境の状態、宇宙開発の進展、メタバースなど仮想空間発展の先にあるものは何か、国や国境という概念にも変化は訪れるのか。世界はもの凄いスピードで変化を加速し続けている。仕事をロボットに奪われる反面、ロボットが農作業をしてくれるのであれば働かなくても食べるには困らないのではないかと、とも考える。もしかすると食べ物を食べなくても、栄養剤の投与だけで生き続けるのかもしれない。これまで、経済が優先される世界の中では芸術文化がいつも最初に不要とされてきたが、ロボットに人類の芸術を理解することは難しいと思うので(可能性はあるかもしれないが)、変化し続ける世界の中で芸術の価値がこれまで以上に輝くのではないかと考える。などと書くと、やや壮大すぎるので直近で考えると、札幌市は人口200万人規模の街として、どのような文化政策を描くのか。ビジョンが非常に大事になってくるのではないかと思う。その為には市民、民間団体、行政の三者が信頼関係を構築することが大事だと考えるので、まずは未来会議のようなコミュニケーションの場づくりを継続して欲しい。

➤市民憲章にある「世界とむすぶ高い文化のまちにしましょう。」という文が子どものころから大好きです。しかしながら実態は、大都市になり過ぎて、文化活動がそれぞれ蝸壺化してしまっているといった言い過ぎでしょうか。そんな中で今後運用される中間支援組織の存在が市民と行政の架け橋となって、小さなイベントから大規模な事業までサポートし、皆が「札幌発の文化」として誇りを持って参加できるようになれば良いですね。

➤札幌市の文化政策は、人口規模から察してもあらゆる分野が乱立する中で、公平性の担保が求められるのだと推測しています。特定の分野への積極的な支援が難しいとするならば、あ

らゆる芸術が活発に展開されるための大きな理念(都市構想)とそれを支える仕組みが必要なのだと考えます。行政は、その枠組みを機能させるために積極的な投資をするという構造が求められるわけですが、今回の未来会議の成果として構築された新たな支援制度が、その一端を担うならばその意義はとても大きいと感じます。

➤まずは何度も繰り返しますが、「表現者＝市民」であり、マイノリティな側面も持っており、どんな市民も生きやすい街こそが豊かな街だと思います。「どんな市民も自由に文化芸術にアクセスできる」こと。「表現者(芸術家)は現代社会の中で表現者として生きる権利があり、その権利を守る必要がある」こと。「表現者が表現者として生きていける社会とは、作品以前にまず、その送り手である「表現者」自体に目が向けられる環境である」こと。「活発な芸術現象を生むには、表現者の層を厚くする」こと。このような考えを、今後も市の文化政策を考える上で軸にしてほしいです。また別件になりますが、正直に言うとまだ現状、札幌で芸術活動を行う上で、誇りに思えることがあまり多くありません。もちろんそんなことは関係なく芸術活動は続けるのですが、他県が羨ましく感じることもあります。というのも、例えば自分の住む街で行われてきた芸術活動の歴史をいつでもまとめて学べるような美術館の常設も機能しておりませんし、多くはないけれど地元で優れた芸術活動を行っている年配の先輩芸術家の方々がおりまして、そういう諸先輩方の活動には勇気をもらえたり誇りに思えるのですが、札幌市の文化政策的にはそういう方々が尊重されているようにはあまり思えません。活動の質よりも、扱いやすい人柄が優先されているような傾向を感じることもあります。その他事例を挙げることはいくらでもできます。そういう状況を目の当たりにしていると、今活動している自分たちも、自分の拠点に何も尊重されないまま歳を取ってなくなっていくのかなと思い、たまに落ち込みます。メディアアーツ都市を名乗っていても、その必然性がよくわからないままな上、例えば一般的にも認知されてるようなライゾマティクスやチームラボなどの作品が街中で体感できるわけでもなく、スカーツの一部企画 or 芸術祭に紐つけてる程度の印象です。中国の深センのような状況になっていくともまだまだ思えません。それでも、一步一步かもしれませんが、ここで活動しててもう少し誇りを持てるような、現状の問題点の把握、基盤の整備、専門領域の尊重などは、改善されているようにも思うことがあります。そこにはまさに今回の未来会議のように、文化部と文化芸術に関わる市民との真摯なコミュニケーションが深く関わってきた蓄積があるのだろう、と思えるようになりました。その関係性を、とても面倒で厄介な案件かもしれませんが、今後ますます深化させて欲しいと思います。

➤最後の本会議で、ちゃぶ台返し的な要素がある事務局提案が問題になりました。それでかなり昔の話を思い出しました。別の役所の事例で、さんざん建設的な意見を出させておいて、最後の最後に事務局がそれは実現できませんと否定する場面があり、メンバーは既定路線への誘導だ、はしごを外されたと激怒しました。そういうことがあると、いかに平場での意見交換が有意義でも、なんだ結局は市民の声を聴いたというポーズだったのか、という行政への失望

が広がります。 課題・問題点の答えとも連動することですが、やはりあらかじめ互いに本音をぶつけ合って、会議の限界点を示した上で意見を聞くというのは肝心ではないかと思えます。その上で、あえて限界点を超える豪速球が飛んできたときに、それをしっかり受け止めていただきたいというのが、文化部のみなさんというか、市職員の方々への期待です。

▶市民の声、大衆の好みといったものは過去の教育やかつての文化がはぐくんだものなので、中高年の大きな声に従うよりも、若者の今に多様な質の高いものを提供することを、札幌の未来を育てるために大切にしてほしいと思います。

▶今回の未来会議の毎回の議論のようにざっくばらんで自由な発想で、先進的・実験的な取り組みを行っていく骨太さ・太っ腹さを期待します。「さすが札幌は面白いね！」と外の人にも中の市民にも思ってもらえるような。文化芸術を担うプレイヤーが生きやすく(経済的にも)、マネージメントする人・行政が活躍でき、享受する一般市民にとっても心の豊かさを感じられる、三方良しの真の文化都市になってほしいです。

札幌市の文化政策への期待や具体的なアイデアは、この1年間でたくさん述べてきましたのでそちらをご覧ください。

▶文化芸術と多様な社会分野の連携という話題が大きくありましたが、そのためにはまず行政内の横断的な議論の場、庁内の連携体制づくりが必要です。文化芸術には、そこにある障害をこじあけて、牽引していく力があると思います。

▶今年度から新しく施行される「文化芸術創造活動支援事業」の当初の計画を述べますと、2022年は実証実験「パイロット事業」の位置付けで小規模でスタートさせ、その実績を重ねながら「札幌市アクションプラン」に盛り込んで本格的に実施するものだとして理解しています。長期的視点に基づいて成長する事業ですので、年々予算が増加していくとともに改善を繰り返しながら事業設計の完成度が高まることを願います。

## 5. 札幌市文化部に一言

▶この度はこのような機会を設けていただきありがとうございました。議論はつきませんので、未来会議は今後も永く続いていくことを願います。

▶会議初期・中期のころでしょうか、これも2、3回発言した記憶がありますが、「そもそも文化部だけで文化芸術のことを進めていくことの視野の狭さ」「文化部こそ、所内で積極的に分野横断すべき」「他部署の声や現場課題を実感すべき」文化部という部署柄、今後多くの場面

で、例えば独自性、創造性、多様性、斬新性などのテーマを網羅すべきシゴトがあるでしょう。それを多様な外部第三者との協働(その在り方さえ議論から)と同時に、内部から変わっていくその「空気、姿勢」は欠かせないと思います。発展・変革へ根源的な努力の部分ですね。異例、前例無い、縦割りだとか、そういう次元は余裕で超えて欲しいですが、世界中から注目されるクリエイティブな自治体行政は、まずその内部改革が当たり前になっているケースが多いと感じます。「文化部こそ」叶えて欲しいのは、部署&分野横断的かつ街に降りていく「動き」を当たり前にする。・どの部署ともネットワーク構築がされている・各部署が抱える地域課題の把握、定期的情報交換・アーティストや芸術文化団体との交流、情報交換・創造的現場の現状把握(よく知っている状況)・文化政策への落とし込み、文化芸術とのマッチングの検討 などなど、、、 文化部が感染源となるべきその「空気づくり」を役所内全体に蔓延させていくことですね。このシゴトの在り方は、必要あれば議会にも承認を求めるべきでしょう。最後に、コミュニケーション、その積み重ねがとても大切だと思うことと、サッポロのクリエイティブな現場で今何が起きているか?を把握することは、とても大事だと思います。もっともっとたくさん出かけて欲しいですね。愛と信頼が欠かせません。

▶いままであった円卓会議から、さらに発展した未来会議の設置を決断いただき感謝いたします。これにとどまらず、もっともっと現場の意見を取り入れ、札幌の文化芸術を活性化させていただけたらと思います。文化芸術は施設を整備することによって発展するのではなく、関わる人が自由に創造活動を行う事により発展するものと思っております。

▶私にとっては文化部さんとは今回初めて密にご一緒する機会でした。そんな機会をいただいたことに感謝致します。会議の中ではいろいろと難しい局面もあったかと思いますが、長い間お疲れ様でした。札幌が全国的にも進んだ文化芸術推進都市になるべく、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

▶また何かご一緒できる日を楽しみにしています。

▶今回の中間支援組織案を実現する為には、大変なご苦勞があったかと思えます。最後まで諦めずに結果に繋がったことは素晴らしいと思えました。

▶ただただお疲れ様でした。勝手なことばかり言っている委員の意見をまとめて、議会にまで持って行っていただきありがとうございます。ひょっとして胃に穴を開けた方がいらっしやるのではと心配です。でも、勝手なことをワーワー言い合うことが意外と大事なのかもしれませんね?これからも札幌の文化をよろしくお願い致します。

▶文化は常に人々の営みから形成するものだとしたら、私たち実践者はその営みに直結する

現場で常に試行錯誤する中で「文化とは何か？」について考え、疑い、学び、実感しているのだと思います。もし会議の場で、私たちの意見やアイデアに戸惑いを覚えるのだとしたら、できれば多くの活動現場に足を運び、様々な人の考え方や価値に触れて欲しいと願います。お互いのバックグラウンドや経験、専門性の違いは、これまでの行政が保持してきた考えや価値観に疑いを持つことを出発点に解消できると私は信じています。

▶一年半、このような場で一緒に議論させていただき、ありがとうございました。毎会議後の僕ら委員の見えないところでの皆さんの労働の大変さを想像するとゾッとします。お疲れ様でした。このような文化部と文化芸術に携わる専門家との密な対話の繰り返しと蓄積が、より良い市の文化政策に繋がっていく大事なプロセスなんだと実感しました。僕はあまり気もつかえず率直な意見を毎回好き勝手に言わせていただいたと思っています。それが悪態に見えていたら恐縮ですが、この街で芸術活動をしている身として、より誇りを持てるような文化芸術都市になって欲しいという目標は共有しているつもりでした。文化芸術は簡単ではありません。芸術家は、既成のものから脱して、未知の物事、未体験の価値観に向かっています。それは必ずしも世の役に立ったり心地良かったりするものでもありません。加えて大抵、お金や安定した生活は二の次です。そんな人たちの考えに寄り添ったり、咀嚼すること自体が面倒で大変な作業だと思っています。それでも、芸術家の生き方に敬意を持って耳を傾けていただけることは、僕らに取っては希望ですし、そのような少し違った価値観に触れることが刺激となり、もしかしたら思いがけない知や好奇心を活性化させるきっかけになっていただければなお嬉しいです。また今回のような議論の軸や話題にのぼった考え方が、この先も文化部内で共有、引き継ぎされていくことに期待しています。

▶長時間、お付き合いいただき、ありがとうございました。予算が議会を通過し、事業が無事スタートすることを祈っております。

▶「市民に還元する」とは税金を投入した作品を市民が享受することではありません。税金を投入することで札幌の文化が育つこと、文化度が上がることです。アーティストや文化活動に税金を投入することで、札幌の文化資源の質が高くなり、底上げされます。質の高いアーティストやコンテンツが増えれば、直接助成を受けていない周辺のアーティストやコンテンツも学び影響を受けて自然と向上します。そうして全体がレベルアップしていくことでしょう。だから、たとえば札幌在住作家を直接助成しなくても、SIAFによって質の高い作品を札幌で見る機会が増えることも、作家や市民の目が養われ文化度向上につながるでしょう。政令指定都市規模の文化行政ですし、助成したコンテンツは市民が見るもの、みたいな短絡的な思考回路に陥らず、北海道の文化を牽引するリーダーシップも期待されているところだと思いますので、札幌市役所の役回りとしてぜひがんばっていただきたいです。

▶文化部の皆さんのお仕事の大変さは、未来会議を通してよくわかりました。本当にありがとうございました。制限の多い中での複雑で緻密な政策やしくみづくりは、感覚派の多いわれわれ芸術系の人間には決してできないような仕事です。また、文化部の皆さんのお仕事自体がすでにアートマネジメントであるという、委員の意見にも同感です。毎回聴く側に徹していらっしやいましたが、文化部の皆さんご自身がクリエイティブにもっとどんどん攻めの姿勢で、ワクワクするような文化政策を打ち出していきたいです！期待しております。いつも大人数の日程調整もおつかれさまでした。

▶未来会議に参加させていただきありがとうございました。まずはここでつながった方々と今後とも気軽に話ができる環境を持てると良いと思います。(行政という立場を置いて)時にはもっとぶつかり合うくらいの気持ちを持てたら嬉しいです。

▶このパンデミックの状況を貴重な機会として捉え、札幌の文化芸術政策を発展・革新しようと全力で走り続けた文化部の皆さまのご苦勞は計り知れません。財政局に芸術家の創造活動の重要性を理解してもらうため、不眠不休で頑張っている姿を見ながら胸が熱くなりました。文化部の担当者の方々と密接にコミュニケーションが取りながらお互いの考え方をぶつけ合う等、行政の現場を知ることができ、非常に有意義な時間でした。ありがとうございました。

▶個人的には、仕事の関係上、なかなか会議に参加できなかったことが悔やまれます。大変申し訳ございませんでした。また、勉強不足・経験不足からなかなか発言ができなかったこと、会議に貢献することができなかったことを情けなく感じております。優しく意見を求めてくださった他の委員の皆様、文化部の皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

▶「文化芸術が社会課題を解決する」とはよく聞きますが、それは少々言い過ぎだと思っています。多様な文化芸術の形態を目にしたり体験した人々が、その課題自体を知り得るきっかけになったり、課題へ向かう視野や心を育むことが、文化芸術の1つ役割なんだろうと感じます。単純にアートを見て衝撃を受けた！カッコイイ！とかはもちろんありますが。「文化」ってなんですか？と聞かれたら、文化部の皆さんは何と答えますか？僕は、文化芸術や創造活動や参画機会の少ない高齢者が多くて、若者が少ない田舎や小地域でプロジェクトを作ることが割りと多いのですが、「アート」と言うと自分の世界じゃない、と引いてしまうケースが多々あるので、場によって文化、文化芸術という言葉を使うことが多いです。僕が言葉にしているのは、「文化とは、あなたのお婆ちゃんやお孫さんが感動したり、活躍する場をつくること」「文化とは、爺ちゃんが言ってた言葉、学校の帰り道、お祭り、お葬式や結婚式、食べること、漁法や農法、遊び、..これらすべてが文化であると思う。」と話します。個人主観ですが「人ひとりが生きて死ぬまでが文化」とも言えると思っています。文化とは、当たり前のいとなみ・暮らしにも光を当てることができんですね。...だからこそ、文化部には文化芸術を軸にしつつも、

「知る・つなげる」の点でも大きく視野を広げていくような所内シゴトの在り方の改革を求めてしまうのです。そのシゴトの仕方自体が、物凄くクリエイティブだと感じます。「文化」は市民のいとなみ・暮らしや精神を支えるものだと僕は思いますし、Mother SHIP、Mother TREE の様な大きな分母であるからこそ、幅広い生活分野と文化芸術とが結びついて、共にスパイラルアップしていけるんじゃないでしょうか。最後に、ユネスコが謳う「文化」の定義文言の中に「共生の方法を考える -Ways of Living Together-」という文言を入れています。これは僕自身の活動の支え・ヒントにもなっています。ありがとうございました。この会議の経験をいただいた皆様へ感謝いたします。

➤今回、未来会議によって行政と民間の協同の道筋が見えましたので、次からは是非、財団（SCARTS）も含め、立場の違う人たちが議論し、よりよい札幌の文化行政がつくられていく事ができたらよいと思いました。

➤本当に、自分としましては、全部の会議の中でほとんど意味のある発言ができなかったことが悔しくてなりません。自分のジャンルの中ではそこそこなキャリアであるのにも関わらず、イチ現場の人間代表で終始してしまったなと思います。画期的な意見も出せず、勉強も足りず、ただ名前を連ねていただけになってしまったこと、申し訳なく思っています。今後またどこかで同じような機会をいただいた際にはこの反省を活かせればと思います。本当にありがとうございました。

➤いろんな委員会やりましたが過去最高に1回が長い会議でした。皆様おつかれさまでした！

➤芸術文化の真価は、世の中にあまり知れ渡っていないと感じることが多いです。民間団体の人でも言語化できる人は多くないと思いますし、文化部の皆さんもそうだと思いますし、市民の皆さんもそうだと思います。私自身も上手く言葉にできないところがあります。そこは今後、向上させていきたいと個人的には思っています。

➤会議のたびに自分の不勉強さと未熟さを思い知らされて落ち込んでいました。でも自分ではないと伝えられないリアルもあると信じてなんとか頑張りました。今後は後輩たちに、少しずつ「みんなで札幌の文化を作ろうよ」と伝えられたらいいなと思っています。

➤会議の場で様々な意見を好き勝手に述べさせていただきました。とても失礼な発言もあったかと思いますが、最後まで参加させていただきありがとうございました！

➤美術作家として今回このような意義のある会議に参加させていただき、ありがとうございました。当事者として現場の声をどれだけ届けることができたのかわかりませんが、根本的



な地点から一歩ずつ信頼関係を築いていく必要性や、そのやり方を粘り強く考え続けることについてなど、色々勉強になりました。今後の札幌市の新しい文化支援によって、表現者が堂々と活動できる、活動しやすい街(≡多様性を尊重する豊かな街)になってくれること、そのための未来会議に参加できてよかったな、と将来的に思えるような展開を願っています。以下、任期を振り返って感じたことです。

1. 覚えている範囲ですが全議論の中で 2 回、文化部側で一方向的に話を進め後出しで委員に報告という事例がありました。7 月のアウトリーチの話と、2 月の事務局に文化部+スカーツが入る話です。いずれも最も話し合いが必要で、文化部のみなさんが市と委員の板挟みになってしまうような話だったと思います。ゆえに仕方のない部分もあるのかもしれませんが、こういうところこそ、委員と文化部の信頼関係が問われると同時に、企画の根幹を左右するポイントです。難しい都合があるのであれば、その理由や背景を事前に丁寧に説明していただきたかったです。7 月の際は結果的に批判が起こりギリギリで事業の方向性が大きく変わりましたし、あの時が最も未来会議の方向性をハッキリ感じたとも思います。全体的には文化部のみなさんには熱心に議論に向き合ってもらえていたし、大変な役をやっていただけたという印象があります。それだけに、最後の最後までもう一度後出し報告が再発して熟議の時間も取れず、後味の良くない気分になったことは、残念でした。面倒なポイントほど創造性が多く含まれているはずで、そういう点で熟議を避けるべきではないでしょう。

2. 特に後半で改めて実感したことが、個人ベース活動と団体ベース活動でも、デザイン領域、音楽領域など、ジャンル別の活動でも、やはり求める要求が全く違うということでした。それはファインアート領域(美術、演劇、ダンスなど)の普段からの悲惨さや不満が圧倒的、ということなのかもしれませんが。

3. 具体的な中間支援組織の議論になると僕自身も知識が浅く、その立場を経験してる委員の声が大きく反映されたように思います。印象としては 7 割賛成、でも 3 割不信感、みたいなバランスだったなと僕は感じました。

その 3 割の内容は、

- ・すでに助成金申請に慣れてテクニックも持っている中間支援組織がより活動しやすくなる(それ自体は良いことだと思いますが)「だけ」になるのであれば、表現者への反映が本当に変わるのだろうか?という点。
- ・中長期的には新しい支援組織を生み出し教育的な機能も持つという話において、長期間かなり力を入れて啓蒙活動しないと新しい組織の新規参戦は難しいのではないかと、という点。
- ・アーティストや表現者よりも中間支援組織の方が強い力を持ってしまう懸念。大抵の場合、コミュニケーション力やプレゼン力は表現者より中間支援組織の方が能力が高い印象があります。そういう状況の中で、中間支援組織が、表現者の問題意識を代弁してくれるような存在に本当になってくれるのかどうか、という点。

このような心配を払拭してくれるような展開になって欲しいですし、そうやっていくように今後の担当の方々に舵取りをお願いしたいと思います。というのも、現状、現場の体感として

はどちらかと言えば表現者よりも中間支援組織の方々の方が、潤っているようにどうしても見えてしまうことがあります。どちらの立場も大変なのはわかっていますし、表現者には中間支援組織のような協力者が必要な場合が多々あることも間違いありません。ただしその力関係や金銭の分配感覚は、表現者と中間支援組織お互いができるだけイーブンであって欲しいんです。協力的にPJを進められることが理想でありそういったPJも既にいくつもあるとも認識しておりますが、表現者は警戒心も強いので、念押しですみません。ゆえに事業終了の際には、評価委員会からの評価だけでなく、支援を受けたアーティスト、表現者側からの評価も必要だと思いますし、表現者の現場からの声をできるだけ直接聞いて状況把握のアップデートを続けるという体制は、今後も強く意識していただければと感じています。

4. もちろん個人的にも支援事業を見守っていくつもりですが、とりあえず1年後のフィードバック、会議で話されたような方向性が実際にどのくらい形になったのかの反省機会が、できれば欲しいです。未来会議の委員の再集結まではせずとも、簡単な報告くらいはいただければ、自分が参加して発言した責任についてより考えることができるかなと思いました。

5. 教育や福祉の問題と同じように、芸術も自治体が責任を持って扱う課題だとみなすべきであり、「芸術は人間の心を豊かにするから大切なんだ」ではなく、「「市民」の中には芸術家も含まれるので、芸術家としても生きやすい社会を訴える」「芸術家として生きる権利、マイノリティの市民権を守る必要がある」という発想を文化部全体で持って欲しい。この点を、伝わるまで繰り返し話題に出そうというのが僕が未来会議において自分に課したミッションの一つでした。バッチリ伝わった！というところまではいけなかったという実感ですが、今後もぜひ継続して意識していただければと思います。

➤ 猛獣遣いのお仕事お疲れさまでした。猛獣のみなさんも、お疲れさまでした。

➤ お声がけいただきありがとうございます。最前線に立つ担い手の実践的な提言、会議で話し合ったことが形になっていくことは本当に素晴らしいと思います。

➤ 委員長の情熱とリーダーシップ、副委員長のまとめ力も、この会議が活発に進行できた大きな要因と思います。

文化行政や助成事業などに知識が浅く、委員の皆さんについていくのにやっとで、個人的には毎回散漫な失言や軽口に反省の多い会議でした。微力でもお役に立てたなら幸いです。

➤ 委員の皆さま、これからもよろしくお願ひします。このつながりを活かして具体的なプロジェクトを一緒にできたらと思います。

➤ 委員の皆さま、文化部の皆さま、本当にお疲れ様でした！